

GPA (Grade Point Average) 成績評価法の理念と実際

～日本の大学における GPA 評価法～

綾 皓二郎

石巻専修大学名誉教授

要旨：本研究の目的は、日本の大学における GPA (Grade Point Average) 評価法の導入・運用について調査し、わが国の GPA 評価法の特徴と問題点、課題を明らかにすることである。さらに、第三者機関による標準カリキュラム・外部試験による単位認定の提言についても検討し問題点を指摘した。本研究により明らかになったことは、日本の GPA 評価法には標準的な GPA 評価法というものは存在しない、GPA は一大学内では使えても対外的な指標としては通用することは難しい、GPA 評価法の成績評価の「厳格さ」の程度には様々なレベルがある、GPA 評価法の中にはアメリカ的な教育観で卒業要件の基準として用いることは難しいものがある、大学は透明性のある GPA 評価法を構築し評価情報を共有して、単位制度の実質化と教育の質保証を図ることが求められている、成績評価に関わる情報の一層の公表に取り組むことが望ましい、ことである。

キーワード：grade point, GPA, 厳格な成績評価, 教育の質保証, 卒業要件

1. はじめに

GPA は Grade Point Average の頭字語でいまだ定まった訳語はないが、ここでは「学修成績評価平均値」としておく。GPA は履修登録した各科目の成績の評価ポイント (Grade Point) と単位数から算出するが、学期あるいは通算の学修の成績を一単位当たりの平均値で表したものである。この GPA を用いた「学修成績評価法 (制度)」全体のことを GPA 評価法 (制度) といっている。

この論文では、わが国の大学で2017年度までにどのような GPA 評価法が採用され運用されているかについて、各大学の Web サイトにおかれた履修規程、学生便覧などの資料やインターネット上にある論文、関連データなどを詳細に調査した結果について報告し、日本の GPA 評価法の特徴と問題点、課題を明らかにする。この中で、GPA 評価法の対外通用性の問題や厳格な成績評価との関連、GPA 評価法と退学勧告・卒業要件、GPA 評価法の本来的意義などについて考察する。最後に第三者機関による学力検定の提言について検討する。

2. GPA 評価法の導入の背景

教育の質保証の観点から GPA 評価法が多数の大学の注目を集める契機となったのは、1998年の大学審議会答申『21世紀の大学像と今後の改革方策について』⁽¹⁾ (以下、1998年答申) において、「厳格な成績評価については、例えば GPA と呼ばれる制度を活用した取組を行っている大学もある」との文言である。さらに、2008年の中央教育審議会答申『学士課程教育の構築に向けて』⁽²⁾ (以下、2008年答申) において、GPA 評価法の導入が強く促されたことにより、これ以降、全国の国公立大学に広く導入されることとなった。また、2004年より大学が認証評価機関による認証評価を受けることが義務付けられ、このなかで成績評価の方法が問われるようになったことが GPA 評価法の導入を急がせた面もある。文部科学省による2013年度の教育内容等の改革状況調査 (以下、2013年度調査)⁽³⁾ によれば GPA 評価法の学部段階での導入率は2006年度40%、2008年度46%、2013年度72%となっている。近年になって有力国立大学での導入も進んできている。

3. 2008年答申における GPA 評価法

第2章第2節 4成績評価の要点を引用する。

(1) 現状と課題

- (ア) 学士課程教育をめぐっては、卒業認定における評価の厳格化も大きな課題となっている。
- (イ) 文部科学省は、成績評価基準の明示、アメリカで一般的に普及している GPA 等の客観的な仕組みの導入を各大学に促してきた。

(2) 改革の方向

- (ア) 教員間の共通理解の下、各授業科目の到達目標や成績評価基準を明確化するとともに、組織的に学修の評価に当たっていくことが強く求められる。
- (オ) GPA も、学生へのきめ細かな履修指導や学習支援の実施、評価機会の複数化と一体的に運用し、学習成果の効果的な達成を促すことに意義がある。

(3) 具体的な改善方策

GPA を導入・実施する場合は、以下の点に留意する：

国際的に GPA として通用する仕組みとする（例えば、評価の設定を標準的な在り方に揃える、不可となった科目も平均点に算入する、留年や退学の勧告等の基準とするなど）。

4. 成績評価と GPA 評価法に関わる用語解説

【学修と学習】単位 (credit) の修得や修了認定に直接かわる能動的な学びを「学修」とすることで、より広い意味で用いる「学習」と区別する（大学基準協会の用語解説）。

【Grade】成績評価、あるいは成績評価の段階（等級）。段階数は一般に5～13段階である。

【RS, Raw Score】成績素点（原成績）の集合（セット）。日本ではほとんどの場合に成績素点を100点法（100-point scale）で表している。RSの要素をrsで表す。rsは成績素点を段階に分けた場合の点数あるいは点数区間である。RSの大きさ（段階数）と要素は大学により様々である。履修規程でRSを明示する、目安とする、明示しない（RSが空集合の）大学に分かれる。2008年答申の用語解説ではRS

については明示されていない。アメリカでは100点法でのRSはほとんどの大学で空集合とされる⁽⁴⁾。

【LG, Letter Grade】各Gradeをローマ字あるいは漢字で表した成績評価の文字集合。LGの大きさはRSの大きさと同じで、一般に5～13段階である。LGの要素をlgで表す。LGの要素は大学により様々である。たとえば、5段階では、LG = {S / 秀, A / 優, B / 良, C / 可, F / 不可}。さらに、要素lgに+, -の符号を付けて細分化することが多い。lgは、rsから定める場合とrsを用いないで評定する場合がある。なお、2段階評価のLG = {P / 合格, F / 不合格}で、Pass / Failureを判定する科目はGPA算出の対象外となる。他大学等で修得した単位を認める場合には、認定(N)科目としてGPAの対象外とする大学がほとんどである。

【GP, Grade Point】あるGradeでの成績評価の点数（評点）の集合。GPの要素をgpで表す。gpには小数点以下1桁、あるいは2桁の離散的な数値が与えられる。GPの大きさと要素、LGとの対応のさせ方は大学により様々である。不合格科目はほとんどの場合、gp = 0とするが、一部をgp ≠ 0とする場合もある。

GPの段階数は一般にLGの段階数と同じであるが、LGの段階数と異なる42段階とする評価法もある。

【GPAの計算式】卒業要件科目について、学期GPAと通算（累積）GPAの計算式として次式が用いられている。

学期 $GPA = \sum (\text{当該科目の } gp \times \text{当該科目の単位数}) / \sum \text{当該科目の単位数}$ (eq.1)

ここで \sum は当該学期に評価を受けた科目についての総和を表す。/ は、数式においては除算記号を表す（以下、同様）。GPAの実現値をgpaで表す。gpaは、小数点以下第3位を四捨五入あるいは切り捨てて、小数点第2位まで表示するのが通例である。

通算 $GPA = \sum (\text{当該科目の } gp \times \text{当該科目の単位数}) / \sum \text{当該科目の単位数}$

(eq.2)

ここで Σ は在学全学期に評価を受けた科目についての総和を表す。通算 (cumulative) GPA (CGPA) の実現値を $cgpa$ で表す。

GPA の算出で注意すべきことは、履修登録して評価を受けたすべての科目 (不合格科目を含む) の gp と単位数が計算式に含まれることである。2013年度調査によれば、学部段階で GPA 評価法を導入している大学の95% は、不合格科目の gp と単位数を含めて GPA を算出している⁽³⁾。すなわち、2008年答申における改善方策の留意点「不可となった科目も平均点に算入する」は、実現されていると考えてよい。

【GPCA (Grade Point Class Average) の計算式】

$GPCA = \Sigma$ 当該科目の履修クラス学生の
 gp / 当該科目の履修登録者数
 (eq.3)

ここで Σ は当該学期の当該科目を履修した学生についての総和を表す。GPCA は教員側からみた授業の成果を表す指標である⁽⁵⁾。GPCA の実現値を $gpca$ で表す。

【CAP 制】学期あるいは年間に履修登録できる単位数に上限を設け、単位制度の実質化を図る制度。CAP 制は、履修取消制度と並んで、履修科目を過剰に登録して gpa が下がることを避けるための仕組みとしても有効である。他方で、高い gpa を獲得した学生には次学期あるいは次年度に履修登録単位数の増分を認めて学修を励ます方策をとる大学が多い。

5. 乱立する GPA 評価法

2008年答申における改善方策の留意点「評価の設定を標準的な在り方に揃える」に関わる調査結果について、GPA 評価法を RS, LG, GP, 可否という形式面から概観する。

日本の大学の成績評価では、長年にわたって100点 (満点) 評価と4段階 LG 評価を併せる4段階評価法 (表1) が用いられてきた⁽⁶⁾。ここで、表1で示す RS は最も一般的なものである。

東京大学は5段階評価の新成績評価基準 (表2) を2014年度に導入している⁽⁷⁾。

他方、アメリカの大学で採用されている GPA

表1 伝統的な4段階成績評価法

段階	RS	LG	可否
1	80 - 100	優	合格
2	70 - 79	良	合格
3	60 - 69	可	合格
4	0 - 59	不可	不合格

表2 5段階成績評価法

段階	RS	LG	可否
1	90 - 100	優上	合格
2	80 - 89	優	合格
3	65 - 79	良	合格
4	50 - 64	可	合格
5	0 - 49	不可	不合格

評価法には、LG = {A, B, C, D, F} の5段階 A-F 方式、GP = {4, 3, 2, 1, 0} という4点尺度 (4-point scale) の基本形がある⁽²⁾⁽⁸⁾。ただし、現在の実際の運用では10段階から13段階の多段階法が用いられることが多い。半田による2009年の調査⁽⁴⁾では、5段階の基本形で評価しているアメリカの大学は32.1%、6～9段階が7.9%、10～12段階が57.0%、13段階は0%であった。しかし、有力大学計60校を対象とする2016年の調査では5段階は稀 (3.3%) で、10～12段階59.3%、13段階26.7%という結果が報告されている⁽⁹⁾。6段階以上の多段階の場合には、基本となる各 lg (F を除く) に +, - を付与して、 lg の +, - に応じて基本となる各 gp に 1/3 (小数点以下第2位 / 3位四捨五入) の増減するのが標準形式となっている。そこで lg と gp との対応はこの大学でも共通である。たとえば、B+ はいつも $gp=3.3$ であり、D は 1.0 で合格である。ただし、A+ の場合は、 $gp=4.0$ にとどめておく大学が多いが⁽⁴⁾、2016年の調査では4.3とする大学も18.3%と少なくない⁽⁹⁾。D- を 1.0 とする大学もある。なお、5点尺度を用いる MIT の評価法のような例外もある。

日本の大学の GPA 評価法は、アメリカの方式に倣ったにもかかわらず、アメリカの大学のような基本形と標準形式は認められず、対外通用性に配慮するとしながらも、大学により様々な方式で定められている。以下でこれを説明する。なお lg は、

通常はローマ字を用いる。不合格で最下位グレードのlgにDやEを用いる大学もあるが、紛らわしさを防ぐため、Fで代表させる。

5.1 4段階 GPA 評価法

表1の伝統的な4段階法との接続に配慮してGPを組み入れれば4段階 GPA 評価法になる。表3は、日米教育委員会 (Fulbright Japan) による「日本の4段階評価への換算表」⁽⁸⁾に基づくものである。

表3 4段階GPA評価法-1

段階	RS	LG	GP	可否
1	80 - 100	優/A	4.0	合格
2	70 - 79	良/B	3.0	合格
3	60 - 69	可/C	2.0	合格
4	0 - 59	不可/F	0.0	不合格

表4は日本学生支援機構 (JASSO) の海外留学支援制度 (協定派遣) における「成績評価係数 (JASSO GPA)」の算出法に基づく4段階評価法である⁽¹⁰⁾。表4の4段階法を導入している大学には、旭川医科大学 (2004)⁽¹¹⁾が、以前に採用していた大学に筑波大学知識情報・図書館学類 (2008) がある^{*1}。

表4 4段階GPA評価法-2

段階	RS	LG	GP	可否
1	80 - 100	A	3.0	合格
2	70 - 79	B	2.0	合格
3	60 - 69	C	1.0	合格
4	0 - 59	F	0.0	不合格

5.2 5段階 GPA 評価法

5段階のGPA評価法を採用している大学が多いが、RS、LGの段階数は同じ5であっても、各集合の要素の取り方は様々である。

● 5段階評価法-1

5段階法を作る場合、4段階法のRSの最上位グレードrs = 80 - 100をrs = 90 - 100とrs = 80 - 89に2分割する方法が簡単でわかりやすい。そのようにして作ったのが、表5の5段階評価法-1である。これは日米教育委員会によるアメリカの5段階評価法 (基本形)⁽⁸⁾と一致する。LGの各要素は要求水準達成度により、A きわめて優秀 Excellent, B 優秀 Good, C 望ましい水準に達している Satisfactory, D 望ましい水準には不十分だが合格 Unsatisfactory Passing, F 不合格 Failing を意味する。この5段階法-1は、国際基督教大学が1953年から運用しているものである⁽¹²⁾。同志社大学、上智大学など多数の大学で採用されている。九州大学 (2007年) はRSを目安としている。桜美林大学 (2000年) は履修規程でRSを明示していない。

表5 5段階GPA評価法-1

段階	RS	LG	GP	可否
1	90 - 100	A	4.0	合格
2	80 - 89	B	3.0	合格
3	70 - 79	C	2.0	合格
4	60 - 69	D	1.0	合格
5	0 - 59	F	0.0	不合格

● 5段階評価法-2

5段階評価法-2 (表6) のRSは5段階法-1と同じである。LGの各要素は、要求水準達成度により、S / 秀 Superlative, A / 優, B / 良, C / 可, F / 不可を意味する。なお、表6ではSで、S / A+ / AA / 秀 を代表させている。GPはGP-1 ~ GP-4まであり、gpの最大値は4.0 ~ 5.0となっている。

表6 5段階GPA評価法-2

段階	RS	LG	GP-1	GP-2	GP-3	GP-4	可否
1	90 - 100	S	4.0	4.3	4.5	5.0	合格
2	80 - 89	A	3.0	4.0	4.0	4.0	合格
3	70 - 79	B	2.0	3.0	3.0	3.0	合格
4	60 - 69	C	1.0	2.0	2.0	2.0	合格
5	0 - 59	F	0.0	0.0	0.0	0.0	不合格

表6のRSとGP-1は、表5のRSとGPと同じであるが、LGは異なっている。これは評価観の違いを表している。4段階法(表3, 4)で $rs = 80 - 89$ ならAの評価であるから、表6 GP-1は5段階法になってもAのままとし $gp = 3.0$ とするが、 $rs = 90 - 100$ ならAの上の評価Sが適切で $gp = 4.0$ とするという考え方である。ただし、この場合には合格の下限がCで $gp = 1.0$ となることで、アメリカの評価法でCが $gp = 2.0$ と比べて、日本人学生が不利になるという指摘がある。S評価がAよりも上という考えを押し進めると、SはGP-2～GP-4のように $gp = 4.3, 4.5, 5.0$ とし、Aは $gp = 4.0$ が望ましいということになる。そうすると合格の下限がCで $gp = 2.0$ となり、不合格のFとの評点の差が2.0と大きすぎるという問題が起きる。

gpの最大値を日本の大学が4.0を超える値に設定する背景には、対外的互換性を考えると、アメリカを含む海外の大学では4.0を超える評価法が少なくないことや⁽⁴⁾⁽⁹⁾、成績インフレーションが進んでいること(後述)の影響が推測される。

表6 GP-1は、玉川大学(2005)⁽¹³⁾、北海道大学(2006, 旧)⁽¹⁴⁾、大阪大学(2014)、東北大学(2016)、などで、表6 GP-2は名古屋大学(2011)、神戸大学(2012)、筑波大学(2016)で導入されている。

一橋大学は2010年度に表5の5段階法(RSは空集合)を導入したが⁽¹⁵⁾、2018年度からは表6 GP-2に移行する⁽¹⁶⁾。表6 GP-3は横浜国立大学(2007)で、表6 GP-4は立命館大学(2002)で採用されている。

日本学生支援機構のGPAの5段階評価法は、RSとLGは表5、表6と同じで、GPを $GP = \{3, 3, 2, 1, 0\}$ としている。

●5段階評価法-3

5段階評価法-3(表7)のRSとLGは5段階評価法-2と同じであるが、GPの要素が異なる。gpを変換式によりrsと1対1対応させて求める方式で、functional GPA (f-GPA)と呼ばれている⁽⁴⁾⁽¹⁷⁾。f-GPAではGP-1～GP-3までである。GPの段階数は $rs = 0 - 100$ の整数であれば42段階となる。 $rs = 0 - 59$ は $gp = 0.0$ で1段階である。 $rs = 60 - 100$ は $gp \neq 0$ の41段階であるが、gpは変換式により異なる。GP-1は、 $rs = 60 - 100$ で $gp = (rs - 55) / 10$ とする同志社女子大学(2004)、静岡大学(2009)、お茶の水女子大学(2011年)、石巻専修大学(2013年)、東京工業大学(2016, LG評価はない)などの場合である。GP-2は $gp = (rs - 54.5) / 10$ の宮崎大学、GP-3は $gp = (rs - 50) / 10$ の徳島大学、西南女学院大学、新潟大学などの場合である。

表7 5段階GPA評価法-3 f-GPA

段階	RS	LG	GP-1	GP-2	GP-3	可否
1	90 - 100	S	3.5 - 4.5	3.55 - 4.55	4.0 - 5.0	合格
2	80 - 89	A	2.5 - 3.4	2.55 - 3.45	3.0 - 3.9	合格
3	70 - 79	B	1.5 - 2.4	1.55 - 2.45	2.0 - 2.9	合格
4	60 - 69	C	0.5 - 1.4	0.55 - 1.45	1.0 - 1.9	合格
5	0 - 59	F	0.0	0.00	0.0	不合格

●5段階評価法-4

5段階評価法-4(表8)は、4段階法から5段階法を作る場合に、4段階法の最上位グレードのrsはそのままにして、最下位グレード $rs = 0 - 59$ を $rs = 50 - 59$ と $rs = 0 - 49$ に2分割するもので、青森公立大学(1993)で導入されている⁽¹⁸⁾。 $rs = 50 - 59$ は $lg=D$ 、 $gp=1.0$ で合格としていることが特徴的である。表8で $LG = \{A / 秀, B / 優, C / 良, D / 可, F / 不可\}$ としている。しかし、これは対外通用性を考えると、 $LG = \{A / 優, B / 良,$

$C / 可, D / 準可, F / 不可\}$ とするほうが好ましいと思われる。

表8 5段階GPA評価法-4

段階	RS	LG	GP	可否
1	80 - 100	A	4.0	合格
2	70 - 79	B	3.0	合格
3	60 - 69	C	2.0	合格
4	50 - 59	D	1.0	合格
5	0 - 49	F	0.0	不合格

●5段階評価法－5

5段階評価法－5 (表9) は会津大学の場合で、4段階法のRSの下位3段階を4段階とするものであるが、rs = 50 - 64, lg = C, gp = 2.0を合格の下限としている。rsの割り当てが特異で、対外通用性に問題が起きると思われる。

表9 5段階GPA評価法－5

段階	RS	LG	GP	可否
1	80 - 100	A	4.0	合格
2	65 - 79	B	3.0	合格
3	50 - 64	C	2.0	合格
4	35 - 49	D	0.0	不合格
5	0 - 34	F	0.0	不合格

5.3 6段階 GPA 評価法

同じ6段階法であっても、LGは共通とみなしてよいが、RS、GP、可否は、各大学で大きく異なっている。

●6段階評価法－1

6段階評価法－1 (表10) は、5段階法－2 (表6 GP-4) に、合格の下限グレードD (rs = 50 - 59, gp = 1.0) を追加して6段階としたものである。創価大学 (2007) や産業能率大学で用いられている。大分大学では、2015年度以前入学生の場合、Dを不合格としている。2017年度入学生では、同じ6段階であるが、Dの代わりにF+を用い、LG = {S, A, B, C, F+, F}, GP = {4, 3, 2, 1, 0, 0} とし、RSは目安とする改定をおこなっている。

表10 6段階GPA評価法－1

段階	RS	LG	GP	可否
1	90 - 100	S	5.0	合格
2	80 - 89	A	4.0	合格
3	70 - 79	B	3.0	合格
4	60 - 69	C	2.0	合格
5	50 - 59	D	1.0	合格
6	0 - 49	F	0.0	不合格

●6段階評価法－2

6段階評価法－2 (表11) は信州大学 (2014) で導入されているもので、合格の上限Sでgp = 4.0、合格の下限Cでgp = 2.0として、gpをこの間で3等分している。そこで、この間ではgpには1段階で2/3 (小数点以下第3位四捨五入) の差がある。rs

= 50 - 59, lg = D は gp = 1.0であるが、不合格である。5段階法－2 (表6 GP-1) と比べるとA, B, Cのgpを高くして、アメリカの評価法との互換性を高める狙いがあると推測される。

表11 6段階GPA評価法－2

段階	RS	LG	GP	可否
1	90 - 100	S	4.00	合格
2	80 - 89	A	3.33	合格
3	70 - 79	B	2.67	合格
4	60 - 69	C	2.00	合格
5	50 - 59	D	1.00	不合格
6	0 - 49	F	0.00	不合格

●6段階評価法－3

6段階評価法－3 (表12) は、京都大学 (2016) の場合でLG、GPはアメリカの5段階の基本形 (表5) を、lg = A+, gp = 4.3を設けることで6段階に拡げた評価法となっている。RSはrsを一律の10点刻みとしないことで評価を厳格にしている。gpの最大値を4.3とし、合格の下限をlg = D, gp = 1.0としたのは、アメリカの評価法との互換性を意識したものであろう。

表12 6段階GPA評価法－3

段階	RS	LG	GP	可否
1	96 - 100	A+	4.3	合格
2	85 - 95	A	4.0	合格
3	75 - 84	B	3.0	合格
4	65 - 74	C	2.0	合格
5	60 - 64	D	1.0	合格
6	0 - 59	F	0.0	不合格

5.4 8段階以上の GPA 評価法

近年の海外の大学のGPA評価法に倣ったのか、日本でも8段階以上のGPA評価法を用いる大学が増えてきている。LGではlg = Fを除いて、lgに+、-を付けている。

表13は、5段階法－2 (表6 GP-1) を拡張した8段階GPA評価法の京都工芸繊維大学の場合である。埼玉大学 (2015) の8段階の場合には、RSは規定していない。lgの+によりgpは0.5の増加となり、表6 GP-1と比べて、GPAを押し上げる効果がある。rs = 60 - 69をC+, Cに分割し、D評価はない。rs = 80 - 100を3分割し、lg = S, A+, Aとしているが、

A+ の上に S があるのはわかりにくい。

表13 8段階GPA評価法

段階	RS	LG	GP	可否
1	90 - 100	S	4.0	合格
2	85 - 89	A+	3.5	合格
3	80 - 84	A	3.0	合格
4	75 - 79	B+	2.5	合格
5	70 - 74	B	2.0	合格
6	65 - 69	C+	1.5	合格
7	60 - 64	C	1.0	合格
8	0 - 59	F	0.0	不合格

表14は、同じく5段階評価法-2(表6 GP-1)を拡張した11段階評価法-1の山梨大学(2012)の場合である。合格の上限 S で $gp = 4.0$ 、合格の下限 C で $gp = 1.0$ として、 gp をこの間で9等分している。 lg の +, - は、 gp の $1/3$ (小数点以下第2位四捨五入)の増減というアメリカの GPA 法と同じであるが、C- と D 評価はない。A+ の上に S-, S を設けているのは特異的である。

表14 11段階GPA評価法-1

段階	RS	LG	GP	可否
1	95 - 100	S	4.0	合格
2	90 - 94	S-	3.7	合格
3	87 - 89	A+	3.3	合格
4	83 - 86	A	3.0	合格
5	80 - 82	A-	2.7	合格
6	77 - 79	B+	2.3	合格
7	73 - 76	B	2.0	合格
8	70 - 72	B-	1.7	合格
9	66 - 69	C+	1.3	合格
10	60 - 65	C	1.0	合格
11	0 - 59	F	0.0	不合格

表15は11段階評価法-2で、北海道大学(2015)の新しい評価法である⁽¹⁹⁾。LG, GP はアメリカの5段階の基本形(表5)を11段階に拡げた評価法となっていて、 lg の +, - は gp の $1/3$ (小数点以下第2位四捨五入)の増減となっている。RS は目安である。 gp の最大値を4.3としている。合格の下限を $rs = 60 - 64$, $lg = C$ で $gp = 2.0$ としている。 $rs = 50 - 59$, $lg = D$ で不合格であるが、 $gp = 1.0$ を与えている。 $rs = 0 - 49$, $lg = D-$ は、他大学では F で

$gp = 0.0$ とするところであるが、 $gp = 0.7$ としている。 $lg = F$, $gp = 0.0$ は、試験の未受験や授業出席回数不足で、学修成果を出す証拠はなかったという意味である。これは、厳格な成績評価とするため、最後まで学修を継続した結果、試験の成績が悪かった学生と、最終的に履修を放棄した学生について gp を区別するためという。

表15 11段階GPA評価法-2

段階	RS	LG	GP	可否
1	95 - 100	A+	4.3	合格
2	90 - 94	A	4.0	合格
3	85 - 89	A-	3.7	合格
4	80 - 84	B+	3.3	合格
5	75 - 79	B	3.0	合格
6	70 - 74	B-	2.7	合格
7	65 - 69	C+	2.3	合格
8	60 - 64	C	2.0	合格
9	50 - 59	D	1.0	不合格
10	0 - 49	D-	0.7	不合格
11	評価無	F	0.0	不合格

北海道大学の旧5段階評価法(2006, 表6 GP-1)では、以下の問題点があったとされる⁽¹⁹⁾。

- ① アメリカをはじめとした多くの海外大学の GPA 評価法と異なっているため、学生が留学する際に不利な評価を受けている。たとえば、 $gpa = 2.8$ で平均以上の優秀な学生がアメリカに行くと平均以下という扱いにされてしまう。
- ② 5段階評価では精度が低く、正しく成績が反映されないため、GPA を活用しにくい状況にある。

そこで、新評価法では、付与する gp を国際的な基準に合わせる(合格の下限の gp を2.0に、最上位の gp を4.3に引き上げる)ようにした、きめ細やかな成績評価を実現するために11段階評価に変更した、とのことである。新旧評価法を同じ rs で比べると、新評価法ではどの段階でも gp がかなりアップしている(たとえば、 $rs = 70 - 79$ で gp は $2.0 \rightarrow 2.7 - 3.0$)。そこで、たとえば全学教育科目の $gpca$ の平均値は、旧評価法の2013 ~ 2014年度で2.40であるが、新評価法の2015 ~ 2016年度で3.10と上昇している⁽²⁰⁾。

新評価法の導入はアメリカの大学との GPA の互換性を考えると、妥当な変更といえるであろう

う。なぜなら、アメリカの大学の gpa の平均値は、1950年代は2.52であったが、これ以降は成績評価のインフレが進行し、2013年には3.15となっている⁽²¹⁾⁽²²⁾からである。ちなみに、玉川大学は、GPA 評価法(表6GP-1)で、海外留学奨学金の申請条件と大学院への学内推薦の基準を $cgpa = 3.00$ としているが⁽¹³⁾、それでもアメリカの gpa の平均値に及ばない。

表16は、11段階評価法-3で、東京外国語大学(2016)の評価法である。合格の上限 S で $gp = 4.0$ 、合格の下限 C^- で $gp = 1.0$ として、 gp をこの間で9等分している。そこで、この間では gp には1段階で1/3(小数点以下第2位四捨五入)の差がある。このような11段階にすることにより、5段階評価法(表6GP-1)と比べると、同じ $rs = 60 - 69, 70 - 79, 80 - 89$ で、 gp は0.0～0.7高くなっている。これも対外的互換性に配慮したものと思われる。

表16 11段階GPA評価法-3

段階	RS	LG	GP	可否
1	90 - 100	S	4.0	合格
2	87 - 89	A+	3.7	合格
3	83 - 86	A	3.3	合格
4	80 - 82	A-	3.0	合格
5	77 - 79	B+	2.7	合格
6	73 - 76	B	2.3	合格
7	70 - 72	B-	2.0	合格
8	67 - 69	C+	1.7	合格
9	63 - 66	C	1.3	合格
10	60 - 62	C-	1.0	合格
11	0 - 59	F	0.0	不合格

表17は、国際教養大学(2004)のアメリカの大学に倣った12段階評価法である。ただし、 $A+$ を $rs = 100$ のみに限定して、しかも A と同じく $gp = 4.0$ としている。合格の下限は $rs = 60 - 65, lg = D$ で $gp = 1.0$ としている。 D^- はない。

表17 12段階GPA評価法

段階	RS	LG	GP	可否
1	100	A+	4.0	合格
2	95 - 99	A	4.0	合格
3	90 - 94	A-	3.7	合格
4	87 - 89	B+	3.3	合格
5	83 - 86	B	3.0	合格
6	80 - 82	B-	2.7	合格
7	77 - 79	C+	2.3	合格
8	73 - 76	C	2.0	合格
9	70 - 72	C-	1.7	合格
10	66 - 69	D+	1.3	合格
11	60 - 65	D	1.0	合格
12	0 - 59	F	0.0	不合格

6. GPA 評価法の国内通用性

GPA 評価法に対外通用性、対外互換性があるかどうかを判断する材料としては、

① RS, LG, GP, 可否という形式面に共通性があるかどうか、

② 形式面の共通性が弱いとしても、 gpa に換算可能性があるかどうか、

がある。日本の GPA 評価法は、表4～表17に示されるように、形式面だけからみても RS, LG, GP, 可否に大きな違いがある。

LG についていえば、 A はどこの大学でも4.0とは限らないし、 $A+$ の上に S を設ける大学もある。 B は3.0、 C は2.0とは限らない。合格の下限が C あるいは D で、 $gp = 1.0$ あるいは2.0であったりする。 D がない大学もある。不可の lg に D や E を用いる大学もある。同じ不可ではあるが、 F の上に $F+$ がある大学もある。

GP についていえば、 gp の最大値には5.0～4.0の幅があるが、最大値を4.0とする大学が2004年の調査⁽⁴⁾で83%を占めている。そこで、対外通用性に配慮する場合には gp の最大値を4.0にする評価法を別に設ける大学もある。たとえば、徳島大学の「標準 GPA」⁽²³⁾(表6 GP-1)や、お茶の水女子大学の f -general GPA⁽¹⁷⁾である(その上、 f -general GPA では、表7GP-1において gp が0.5以上1.0以下の値を一律1.0にする)。国際教養大学のよう、 rs が異なる $A+$ と A を同じ $gp = 4.0$ とする評価法もある。他方で、同じく対外通用性に配慮しても、 gp の最大値を4.3以上にする大学も少

なくない。近年になって、北海道大学 (2015) や筑波大学 (2016)、一橋大学 (2018) のように、国際的な基準に合わせるとして **gp** の最大値を4.0から4.3に変更する大学もある。なお、**gp** の数値については、小数点以下第1位までとする大学もあれば、小数点以下第2位までという大学もある。その上、**gpa** を小数点以下第2位まで求めるとしても、有効数字の問題もあり⁽²⁴⁾、四捨五入か、切り捨てかという違いもある。

ということで、現状では **GPA** 評価法は、2008年答申の「評価の設定を標準的な在り方に揃える」ことに留意されて導入されているとはいえないことがわかる。確実に標準的といえるものは、**GPA** を算出する式に不可となった科目をも組み入れていること以外に見当たらない。標準的に近いといえるのは、**LG** を5段階とする大学が、半田の2004年の調査⁽⁴⁾によれば70% 占めていることで、5段階法といえるかもしれない。しかし、5段階法に限っても表5～表9まであり、共通性があるとはとてもいえない。さらに、近年は6段階以上の評価法が増える傾向にある。

以上から、**GPA** 評価法が大学間で大きく異なる現状では、**lg** や **lg** の数、**gpa** だけを取り出す形式的な比較であっても、**lg** と **gp** との対応に共通性はないので、互換はうまくいかない場合がほとんどである。したがって、それらが自大学を超えて一般性をもって国内外で通用することは難しいことがわかる。

GPA 評価法の通用性を判断する一つの材料に他大学等で単位を取得した科目の取り扱いがある。入学以前に他大学において取得した単位、または在学中に他大学との単位互換や留学等で取得した科目を認定科目としてその単位を卒業要件単位数に算入することを認めている大学は多いが、これらの単位を **GPA** の算出に組み入れている大学は少ない。

半田によれば⁽⁴⁾、他大学で取得した単位の **GPA** への算入を全体の14% しか認めていないことは、多くの大学で成績評価の通用性が疑問視されていることを示唆する。成績判定の基準は、大学が異なれば互換不能なほど異なると考えるのが自然であり⁽⁴⁾、大学ごとに評価方法が異なる成績は客観的な判断基準として使えないということであ

らう。

GPA 評価は学内での学期ごとの「成績通知表」には詳細が通知されても、対外的な「成績証明書」での取り扱いは大学により様々である。**gpa** と **lg** = **F** (不可) を、記載する大学としない大学に分かれる。通常は **gpa** を記載しない大学でも、留学等で必要となる場合には記載することにしている。「**GPA** 証明書」を別に発行する大学もある (例：早稲田大学)。国際基督教大学や関西国際大学、鳥取大学などは、「成績証明書」(和文) では **GPA** 評価法 (表5、表6 GP-1) を用いないで、伝統的な4段階評価法 (表1) を用いて、**LG** から不可を除く、優、良、可の評価を記載している^{(12) (25)}。アメリカの大学でも **gpa** を成績証明書に載せない、学外には知らせないとしている大学がある (Stanford Univ., Swarthmore College など)。

そこで、就職先や他大学大学院等に **lg** や **gpa** が記載された「成績証明書」を提出するときには、併せて自大学の **GPA** 評価法の説明書を添付しないと、**lg** や **gpa** が提出先で公正に評価されないことが起きる可能性があるといえる。ただし、説明書が添付されても、企業や大学院が各大学の **GPA** 評価法を理解して **gpa** を公正に換算することは容易ではない。

以上を要約すれば、様々な方式が乱立する現在の日本の **GPA** 評価法は、一大学内では使える評価法とはなっても、対外通用性がある、全体的に国際的な互換性を視野に入れて導入されているとはいえないことになる。乱立する **GPA** 評価法は学生の利益に結びつかないことに留意すべきであろう。

大学人として反省すべきことは、2008年答申を受けて、国立大学協会や私立大学連盟などが **GPA** 評価法の具体的な在り方を検討し指針を示すべきでなかったかということである。答申には、【国によって行われるべき支援・取組】として「成績評価の在り方に関して、対外的な信頼を確保する上で、最低限共通化すべき事柄は何かを検討し、適切な対応を取る。例えば、**GPA** の標準的な在り方、成績証明書の基本的要件などについて検討する」とある。

7. 客観的で厳格な成績評価と GPA 評価法

7.1 客観的な成績評価と GPA 評価法

客観的で透明性のある成績評価のために、各教員がやらなければならないことは、

- ①授業の目的と到達目標、授業の内容と水準、成績評価の方法と基準などのシラバスでの明示、
 - ②シラバスに基づいた授業設計と実践、および総合的な成績評価、
- である。

成績分布に大きな偏りが起きることを避けるためには、学生の能力に見合った適切な到達目標を設定し、平均点がある枠内（たとえば70点）に収まる授業設計、および1回の期末試験だけではなく中間試験・レポート・授業への参加態度などの多面的な成績評価が求められている。

2008年答申では、成績評価の大学全体での組織的取り組みについて

- ・成績評価の結果については、評価基準に準拠した適正な評価がなされているか等について、組織的な事後チェックを行う、
- ・教員間で、成績評価結果の分布などに関する情報を共有し、これに基づくFDを実施し、その後の改善に生かす、

を示している。組織的な取り組みでは、たとえば弘前大学は、教養教育科目について成績評価の方法と基準をガイドラインとして定めている⁽²⁶⁾。筑波大学は、教育組織等ごとに「成績評価分布の目標値」を設定している⁽²⁷⁾。

GPA 評価法では、成績評価は到達度評価で行うので「絶対評価」が基本となる⁽²⁸⁾。すべてのlgの比率を規定することは相対評価となるので避けるべきとされているが⁽²⁹⁾、相対評価を部分的に組み合わせて、lgの比率、あるいはlgの組み合わせの比率を定めることがある。たとえば、Sは5%（弘前大学、創価大学）、Aは履修者の10%まで、Bは履修者の30%までとする（桜美林大学）。A+およびAの取得者数はA+・A・B・C取得者数の合計の3分の1以下とする（一橋大学）、など。なお、筑波大学で目標とするA+・Aの割合は、学群によりかなりの違いがある（30%以下、概ね30～40%、50%以下など）。

成績評価結果の分布（授業科目別あるいは担当教員別の各lgの%、gpcaなど）は、教授会、学

内に公表されるのが通例である。これにより、教員は適正な授業内容と成績評価を意識することが促され、授業の改善が進む（たとえば、いわゆる楽勝科目が減り、成績評価の厳格性につながる）ことが期待されている。

北海道大学や同志社大学は授業科目に関する成績評価結果の分布をWebサイトで公開している数少ない大学であるが⁽²⁰⁾⁽³⁰⁾、これには成績評価の公平性と信頼性を確保し、学生および第三者に対する説明責任を果たす狙いがある。北海道大学の成績評価では、たとえば全学教育の科目を見ると、科目別gpcaの範囲は2013～2014年度（旧評価法）で0.39～3.15であり、科目により成績分布に大きな違いが認められる。同志社大学の理工学部の2015年度の授業ではgpcaの範囲は0.2～4.0であり、A評価が極端に多い教科と少ない教科があることや、F評価が30%を超える科目が相当あることがわかる。このように成績評価の結果の組織的な点検と公開に積極的な大学がある一方で、2013年度調査によれば、各教員間、もしくは各授業科目間の成績評価基準の平準化を行っている大学は、国公立大学の7%にとどまる⁽³⁾。

7.2 厳格な成績評価と GPA 評価法

1998年答申では、厳格な成績評価の例としてあげられるGPA制度であるが、厳格な成績評価とGPA評価法は直接には関係しない⁽²⁴⁾⁽³¹⁾⁽³²⁾。厳格な成績評価の前提として、客観的で透明性のある成績評価および日常的な履修指導と学習支援、授業での学生との良好なコミュニケーションが必須である。GPA評価法においては第一次の評価であるrs、lgの客観的で厳格かつ公正な評価が大前提となる。この前提が満たされなければ、第二次評価であるGPAが厳格な評価にはならないのは、GPAの計算式を見れば自明のことである。

GPA評価法が伝統的な4段階評価法（表1）と比べて厳格な評価といえるのは、次の点である。

- ①不合格科目の成績も（ほとんどの場合にgp=0として）GPAに組み込んで、学修評価に不合格科目の成績を反映させている。
- ②ほとんどの大学が5段階以上の多段階GPA評価法に移行して、lgとgpを細分化して評価の精度を高めている。たとえば、5段階法-2（表6）

では、表1での $rs = 80 - 100$ の $lg = \text{優}$ を、 $rs = 90 - 100$ の $lg = S$ と $rs = 80 - 89$ の $lg = A$ に2分割して成績優秀者の区分けを厳しくしている。これにより成績上位者の学修意欲を高めることができる。

- ③ GPA 評価法を進級・退学勧告・卒業要件の基準に採用している大学がある。一定の $cgpa$ を基準とすることにより、これらの要件を厳格にできる。

GPA 評価法の「厳格さ」には以下の問題点がある。

- (1) 評価の「厳格さ」は、第一義的に授業の内容と水準、および成績評価の方法と基準に依存するが、教員間で統一された見解がない場合がある。そこで、評価 A といっても、どの科目について誰にもらったか、履修者の何%に与えられているか、どのような基準を満たしたものかななどを付記しなくては、何を意味しているのかわからない⁽³³⁾ ということになる。
- (2) 成績評価の分布が、科目・科目区分・評価者・クラスの規模などにより、大きく異なる傾向が認められる^{(20) (29) (30) (34) (35)}。
- (3) 難易度のばらつきが大きい選択科目群がある場合、GPA 評価法は厳格といえるか。このような場合、履修科目の選択が gpa を高める方向に走ってしまい、本来学んでほしい科目が敬遠されることが起きる。これを防ぐために、P/F科目を設けることや、北海道大学の自由設計科目⁽³⁶⁾ などがある。これによりGPA 評価法と難解な科目や多様な科目の履修を両立させようとする。また、習熟度別の授業科目では評価に不公平が生じないように対応が求められている。
- (4) RS や GP の段階数、 rs と gp との対応法が異なれば、当然「厳格さ」も異なってくる。GP の段階数が少ない GPA 評価法では成績評価の精度が粗く、 rs が正しく gp 反映されないとして厳格な成績評価を担うとはいえないという指摘がある。+、-付の lg で gp を与える10段階以上のほうが、さらに成績素点を明示的に100点法で求め、 rs を gp に1対1で変換する方式の f-GPA 評価法^{(4) (17)} のほうがより厳

密な評価法となる。すなわち、 rs と gp が1対1対応しない ordinary GPA (o-GPA) は、各グレードの区間内で高い点をとった学生ほど点数が下がり損をし、低い点をとった学生ほど点数が上がり得をする不公正な評価となっている。たとえば、表5で $rs = 90$ の $lg = A$ と $rs = 100$ の $lg = A$ は明白に異なった成績である。また、 $rs = 60$ と $rs = 69$ は同じ合格ではあるが、明らかに意味が異なるものとして教員は認識しているにもかかわらず、o-GPA では同等に扱われる。このことは、GP5段階の o-GPA (表5) と GP42段階の f-GPA (表7 GP-1, $gp = 0$ for $0 < rs < 59$, $gp = (rs - 55) / 10$ for $rs > 60$) における rs と gp の変換のグラフ (図1) を見れば直ちに了解できる。

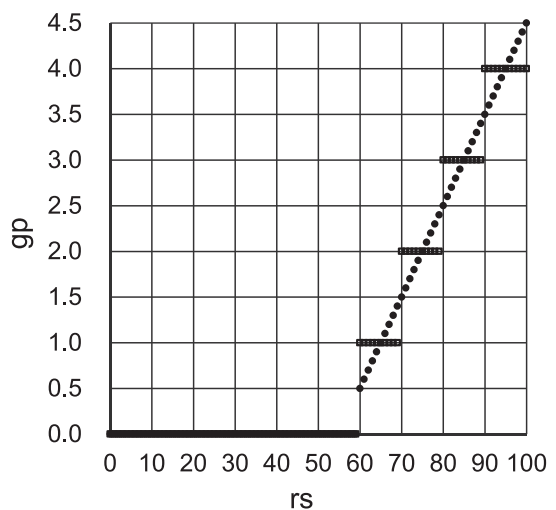


図1 素点 rs と評点 gp との対応
 ■■■■ 5段階o-GPA (表4)
 ●●●● f-GPA (表6 GP-1)

岡山大学では GPA に各科目の成績をより細かく反映させるため、2016年度に o-GPA (表5 GP-1) から f-GPA (表6 GP-1) に改定している。

成績による順位付けを行う場合に、o-GPA に基づく成績順位と100点法での rs の平均点に基づく順位が大きく食い違う評価が生じる場合があることが報告されている⁽⁴⁾。これでは o-GPA は厳格な成績評価とはいえず、学生に公正な評価感を与えることはできない。成績優秀者の表彰や奨学生の選抜などで

GPA 評価法を利用する場合に学生の信頼を失う恐れがある。しかし f-GPA 評価法ではこうした不公正が生じないとされる⁽⁴⁾。

- (5) 従来100点法では60点未満は不可とするのが通例であったが、rs = 50 - 59でも望ましい水準には不十分だが合格とする評価法(表8, 9, 10)を厳格な評価とってよいか、疑問がある。gp ≠ 0であってもよいが、不合格とすべきではないか(表11, 15)。このような合格の評価では、学生に不十分な理解でもかまわないといった間違った認識を引き起こす、十分な理解のないまま進級してきた学生への上位の専門教育が難しくなる、という意見がある。
- (6) 履修科目の単位数の違いが GPA に効いてきて公正さが損なわれることがある⁽⁴⁾。対策として、半期2単位の科目を原則とすることや、一橋大学のように卒業論文を LG で評価するが、単位数はないとするなどがある。
- (7) GPA 評価法による評価と卒業研究で見られる力には乖離があるとの報告がある⁽³⁵⁾。GPA は高いのに新しい発想が出てこない学生がいる一方で、GPA は低い研究のセンスは抜群の学生がいる。

7.3 GPA 評価法と退学勧告、卒業要件

2008年答申における改善方策の留意点「(GPA を) 留年や退学の勧告等の基準とする」について述べ、「学びの質」を問う「厳格さ」の程度は、通算 GPA のスコア cgpa だけでは決められないことを明らかにする。

伝統的な卒業認定では総単位数(例: 124単位)の修得だけで卒業を認めるので「学びの量」しか問題にしていない。他方、GPA 評価法を用いて一定の cgpa (たとえば 2.0) 以上の獲得を卒業の追加要件とすると、GPA には不合格科目の gp と単位数をも計算式に組み込んでいることから、卒業に至る学修過程と学修の質が反映されるので、GPA 評価法は「学びの質」を問う厳格な評価法であるとの主張がなされている⁽³⁷⁾。しかし、これには、厳格な評価というが合格の下限が rs=50で gp=1.0ではないか、合格の下限を rs=60で gp=1.0とする場合は、より厳格な成績評価で単位の修得を認めているのであるから、総単位数の修得要件

だけで質保証は満たされている、との反論がある。

● 卒業要件 cgpa = 2.0, 1.5, 1.0

cgpa = 2.0を卒業要件とする大学に玉川大学⁽¹³⁾や青森公立大学⁽¹⁸⁾、cgpa = 1.5の大学に桜美林大学、cgpa = 1.0とする大学には関西国際大学⁽²⁵⁾がある。この四大学は同じ5段階評価法であっても GP と RS、可否は大きく異なっている。玉川大学、関西国際大学は RS を明示している(表6 GP-1)。桜美林大学の RS は、履修規程上は空集合であるが、シラバスを見ると表5と同じ RS を明示している教員は少なくない。そうすると、同じ gp でも、青森公立大学(表8)の rs は、他の三大学の rs と比べると10点も低いことになる。青森公立大学では rs = 50 - 59でも gp = 1.0で D の合格であるが、他の三大学では rs = 50 - 59では gp = 0.0で不合格である。青森公立大学では、lg = A、gp = 4.0とする rs は 80 - 100と広く、A は比較的取得しやすい。そこで、最低の合格 lg = D をとつても、A をとることにより比較的容易に D の失点をカバーできるので、cgpa = 2.0以上を獲得することはそれほど難しくはないはずである。したがって、青森公立大学の卒業要件は、玉川大学や桜美林大学よりも厳しいものではない、関西国際大学とほぼ同じといえる。青森公立大学が「(学修に) より高い目標を持ってもらいたいという希望を込めて、C 段階(rs = 60 - 69) 以上を求めています」という学力水準は、他の大多数の大学と変わらない。

青森公立大学の退学勧告率は、3学期連続して、当学期 gpa = 2.00未満で、かつ cgpa = 2.00未満を退学勧告要件とする入学年度1993～2005で、平均9%とやや高いが、勧告要件を4学期連続に緩和した入学年度2006～2014の退学勧告率は、平均で2.6%と1/3以下に低下している⁽³⁸⁾。2014年度の退学率は4.6%であり卒業率は91.4%である⁽³⁹⁾。退学率は社会科学系学部の全国平均8.5%よりかなり低い値である。他方、関西国際大学の2014年度の退学率は15.5%であり卒業率は76.7%である⁽³⁹⁾。

● 卒業要件 cgpa = 2.0 と gpa の平均値

玉川大学の卒業要件は cgpa = 2.0である。玉川大学を卒業する学生の平均 gpa は分からないが、玉川大学と同一の GPA 評価法(表6GP-1)を導入している東京理科大学の GPA については詳しい

データが公表されている⁽⁴⁰⁾。2013年度のデータでは、全卒業生でみると gpa の平均値は 2.15 (二部を除くと 2.20)、標準偏差 0.73 の正規分布をなしている。女子学生の平均 gpa が 2.37、男子学生の平均 gpa が 2.09 である。学科別の平均 gpa では 2.0 未満の学科が 4 学科もあるので、東京理科大学の学生は、玉川大学の卒業要件では 40 ~ 50% が卒業できないことを意味している。2014年度の卒業率をみると、玉川大学は 82%、東京理科大学は 80 % で、ほぼ同じである⁽³⁹⁾ (二部を除く)。東京理科大学が通算 GPA を卒業要件とする場合、80% 程度の卒業率を見込むとすれば、ミニマムの cgpa は 1.5 - 1.6 となるが、これは卒業要件が cgpa = 1.5 で卒業率が 79% である桜美林大学とほぼ同じである。ということで、玉川大学の卒業要件 cgpa = 2.0 は、相当に厳しい基準であることがわかる。

一橋大学は 2010 年度に導入した評価法 (表 5) の下での卒業要件 cgpa = 2.0 (経過措置、= 1.8) を、2017 年度からの新評価法 (表 6 GP-2) では廃止する⁽¹⁶⁾。その理由として、四学期制の下で履修撤回制度が廃止され、学生が GPA の低下を避ける手段が失われること、学生に難易度の高い授業へのチャレンジを促すことなどをあげている⁽⁴¹⁾。新評価法では合格の下限が lg=C, gp=2.0 (合格水準に達している) であることも廃止する理由として考えられる。

● 合格の下限 D, gp = 1.0 の意味

表 5 で合格の下限を D (gp = 1.0) とした上で、cgpa = 2.0 以上を卒業要件とすることは、アメリカの GPA 評価法の考え方に倣ったものである。これは「多くの授業で合格最低点を取るような学生は卒業させないという質保証に関わるメッセージとする」⁽⁴²⁾ という意味がある一方で、「少数の科目で最低の合格である D 評価でも別の科目が秀でていれば、通算 GPA を使うことにより、全体として一定の成績水準を確保しているとして卒業できる学生がいてもよい」ことを意味する。ここに D 評価の存在意義がある⁽⁴³⁾ とされる。青森公立大学や創価大学で合格の下限を rs = 50 - 59 とし、D (gp = 1.0) で合格としているのも、この教育観に沿ったものと思われる。ただし、近年のアメリカの大学の成績評価は、以前とは異なった様

相を示していて D 評価の存在意義はあまり意味をもたなくなっていることを示す報告がある。

① 成績評価のインフレが進行しており^{(21) (22)}、現在のアメリカではほとんどの教員が A か B をつけ、C や D をつける教員はいない⁽⁴⁴⁾。

Levine and Cureton (2000) による 1993 年の調査⁽⁴⁵⁾ では C 以下は 9%、Franke et al. の 2008-2009 College Senior Survey⁽⁴⁶⁾ によれば、C が 1.2%、D が 0.0% である。Cornell 大学の 2015 年の調査 PULSE Survey⁽⁴⁷⁾ によれば、研究大学では C 以下は 1.0 ~ 0.5% である。Stanford Univ. では C をつけられることはほとんどないという⁽⁴⁸⁾。ただし D が 3.5% という報告もある⁽²²⁾。

② D 評価の科目があると実際には進級や卒業が難しくなる大学が少なくない。

主専攻の科目では最低限 C 評価を必要とする授業があり D の合格では進級できない、必修の先修科目が D であると後修科目が履修できないといった制限を明示する大学が少なくない^{(49) (50)}。日本の大学において、D で単位は取得できても進級や履修の制限があるかどうかは Web サイトの情報では確認できない。

7.4 科目難易度を考慮した GPA 評価法の提案

現行の GPA 評価法の問題点として、履修が難しい科目であっても易しい科目であっても同じ rs なら同じ gp が与えられて GPA が算出されることが指摘されている。同一学部内で、さらに他学部との成績比較ができるようにするために、科目難易度を考慮した GPA 評価法が提案されている。林は、相対評価基準を用いた RGPA 評価法 (表 18) と偏差値換算基準を用いた SGPA 評価法を提案している⁽⁵¹⁾。

表 18 5段階GPA相対評価法

段階	評価%	LG	GP	可否
1	上位 10	S	4.75	合格
2	次の 25	A	3.85	合格
3	次の 30	B	2.50	合格
4	次の 25	C	1.15	合格
5	下位 10	F	0.25	不合格

これらの方法では、履修学生が 100 人以上のクラスから 10 人未満の少ないクラスまで、一学部で

数百、一大学では数千にもものぼる評価対象科目について、成績分布が必ずしも正規分布にならない場合においても、科目間の難易度調整が可能かという新たな問題が起きると思われる。

稲垣・能上が提案する方法は、GPA に科目難易度の重み付けを行って、計算式の分子を(当該科目の $gp \times$ 当該科目の単位数 \times 難易度)の総和として、算出するものである⁽⁵²⁾。

8. GPA 評価法の本来的意義と課題

● GPA 評価法の位置づけ

学士課程教育のグランドデザインは、2008 年答申でいう

- ①入学者受入れの方針(アドミッション・ポリシー)
- ②教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー)
- ③学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)

にある。GPA 評価法はこの三方針と整合するものでなければならない。方針①に関しては、多様な学力レベルの学生を受け入れる以上、GPA 評価法を導入して、特に低学力者に対してきめ細かで丁寧な履修指導と学習支援をすることが求められている。GPA 評価法は、特に方針②を具体化するものの一つであり、CAP 制と併せて単位制度の実質化を図り、より厳格で公正な成績評価により、学士課程教育の質の保証を目指すことで、方針③を支えるものでなければならない。

● GPA 評価法における大学と教員の課題

本質的課題には、次のようなものがある。

- ①明確な教育理念と成績評価基準を共有しながら、責任ある成績評価制度を構築すること⁽¹⁾⁽⁶⁾
- ② GPA 評価法のデータ、成績分布に基づいて授業の改善に努めること

● 成績評価情報の公開と分析

2010年の学校教育法施行規則の改正により、大学等が社会に対する説明責任を果たすとともに、教育の質を向上させる観点から、教育情報の一層の公表に取り組むことが求められている。GPA 評価法や成績評価結果の分布などの成績評価に関わる情報についても、各大学が Web サイトに掲出する場に共通性を持たせて、学内のみならず学外にも提供することが望まれる。この情報公開は、

成績評価の信頼性と通用性の確保に欠かせないものである。

GPA の成績分布を公表する意義として、同志社大学は「学生、教員双方の側に授業に対する真剣な態度を育成する効果がある」ことを報告している⁽⁵³⁾。また東京理科大学は GPA データの分析により「1年次終了時の GPA と卒業時の GPA には高い正の相関があることから、初年次の導入教育の重要性が裏付けられた」と結論づけている⁽⁴⁰⁾。

● GPA 評価法の利用上の注意

GPA 評価法は従来の学修指導の方法を代替するものではなく一つの参考尺度であるという認識が必要である。学期あるいは通算の成績が gpa あるいは、 $cgpa$ に縮約されることから学修の全体像を掴みやすいが、GPA 評価法の前提条件が忘れ去られ、これらの数値が独り歩きする恐れがあることに注意しなければならない。また、教員がアドバイザーとしてきめ細かな履修指導や学習支援をあわせて行うことが求められている⁽²⁾。2013 年度調査によれば、全国の大学でアドバイザー制の実施率は50.7%となっているが⁽³⁾、問題は学生の実際の相談率を高めることにある。

● GPA 評価法と卒業判定、退学勧告

GPA 評価法を卒業判定、退学勧告の基準に採用している大学は、2013年度調査によれば、4.7%、6.8%にとどまっている。この数字が示すように、大多数の大学は GPA 評価法を退学勧告の基準とすることには慎重な態度を崩さない。その理由として、日本社会では中退者が概して評価されないことから、入学させた以上は卒業まで大学が責任を持つのが当然という教育観が有力で、退学率を高めることに保護者・教員の同意が総じて得られにくいという事情がある。また、私立大学の中には卒業判定が厳しいと学生が集まらないのではないかという定員確保の懸念もあると思われる。

退学勧告制度は GPA 評価法の本質とは何らかかわりない⁽⁶⁾、GPA 評価法を罰や排除の論理で退学勧告に用いても学生の学修意欲の向上には繋がらない、退学勧告には多面的な検討が欠かせない⁽⁵⁴⁾という意見がある。なお、GPA 評価法のなかには合格の下限を $lg = C$, $gp = 2.0$ とするものがあり(表6, 9, 11, 15)、これではアメリカ的な教育観で退学勧告を行う基準とすることは難しい。各

大学は退学勧告の基準を形式的に設定するのではなく、基準を設ける教育観が問われていることに留意すべきである。

● GPA 評価法の標準化の検討事項

GPA 評価法の基本形を定めることが望ましい。

- ・ 段階数は5段階、6段階が適当である。これをもとに多段階の標準形式を作っていく。
- ・ RSについては空集合も認めてよい。
- ・ rs の1区間における点差は10に拘らない。
- ・ 最上位グレードの rs の区間の点差を $rs = 80 - 100$ と広げない。
- ・ gp, gpa を小数点以下第何位までとするかを定める。
- ・ gp の最大値を定める。対外国の互換性に配慮すると、最大値は $gp = 4.0$ に拘らなくてもよい。
- ・ lg の +, - に対応する gp の増減値を定める。
- ・ 合格の下限の rs, lg, gp を定める。
- ・ A+ 評価の上に S 評価を作らない。
- ・ 不合格で最下位グレードの lg には F を用いる。

9. 第三者機関による学力検定

2008年答申では、成績評価について「客観的な評価の推進には、資格や検定といった外部試験などの活用も考えられる」と述べている。これについて、潮木は、現在の単位制度では学生が何を修得したのか確認できないとして、以下の提言をしている^{(44) (55)}。「科目ごとに、第三者機関である資格認定機関を立ち上げ、標準カリキュラム、標準（共通）教科書を作成し、共通問題を使った資格認定試験（学習達成度テスト）を実施する。教員の単位認定権を廃止し、大学経営者が資格認定試験により単位認定の基準点数を決めて単位を認定する」。この場合、授業は資格認定試験の準備学級となり、教員はこの資格認定試験のコーチ役に徹すべきとされる。

この潮木の提言にはいくつか疑問がある。疑問の一つは、教育の質保証と並ぶ重要課題である教養教育についての言及がなく、資格認定試験の予備校と化する大学において教養教育をどのように再構築するかの視点がまったく不明であることである。また、共通資格試験の成績が大学と教員の

評価に直結するとなれば、教員の支持が得られるかは疑問であり、多くの大学の参加は期待できないと思われる。

9.1 第三者機関によるモデルカリキュラム

モデルカリキュラムを策定している第三者機関に情報処理学会がある。同学会は『情報専門学科におけるカリキュラム標準 J07』⁽⁵⁶⁾ を定め、情報教育分野の各知識領域について体系的に学んでいくべき指針となるカリキュラム構成や最低限習得させるべき項目をコアと指定している。ただし、具体的な科目をどう構成し、カリキュラムをどう組み立てるかは、教育機関の創意工夫にすべて委ねている。カリキュラム標準 J07に準拠した情報処理学会編集の教科書が発刊されているが、潮木のいう意味での標準教科書と呼べる位置づけは与えられていない。

医学教育については『医学教育モデル・コア・カリキュラム』（平成28年度改訂版）⁽⁵⁷⁾ が作成されている。これは、各大学が策定する「カリキュラム」のうち、全大学で共通して取り組むべき「コア」の部分抽出し、「モデル」として体系的に整理したものである。各大学における具体的な医学教育は、学修時間数の3分の2程度を目安にモデル・コア・カリキュラムを参考とし、授業科目等の設定、教育手法や履修順序等残りの3分の1程度の内容は各大学が自主的に編成するものとする、とある（平成22年度版では、教育課程のすべてを画一化したコア・カリキュラムの履修にあてるとは正しくなく、各大学においては、それぞれの理念等に基づいて、特色あるカリキュラムを設定することが必須である、と述べている）。また、教育手法や教材等の開発や共有が進むことを求めているが、これは教育の自主性を奪うものではなく、限られた教育資源の有効活用の観点であることを付言している。

モデル・コア・カリキュラムに準拠して、全国の医科大学・大学医学部の学生を対象に行われる評価試験に「共用試験」があり、2005年度から実施されている。「共用試験」は、学生の質の保証の前提として、臨床実習を実施する基準に達していることを確認するための第三者機関が行う試験である。「共用試験」の一つに Computer-Based

Testing (CBT) がある。CBT は、知識の理解力を評価する科目統合型の客観的な合否判定試験であって、科目別に成績を評価し単位認定するものではない。なお、歯学・薬学・獣医学教育においても、同趣旨のモデル・コア・カリキュラムと「共用試験」がある。

潮木は、日本学術会議による『分野別の教育課程編成上の参照基準』⁽⁵⁸⁾の作成や JABEE (日本技術者教育認定機構) による教育プログラムの認定制度⁽⁵⁹⁾が進化していけば、分野ごとに基本的な教育内容が定義され、共通教科書が編集され、共通テストの作成に発展していくことを期待している。しかし「分野別参照基準」は専門分野についてのナショナルカリキュラムを示すものではなく、包括的で概念的な枠組みである。また、JABEE の認定制度は学生個人の資格認定でもなければ、教育機関に一定のカリキュラムや達成度を押し付けるものでもないことを明言している。

小・中・高等学校の教員養成の課程教育も、標準カリキュラム・共通教科書があるわけではないが、大学間での違いはそれほど大きくはない。授業内容と単位認定、教科書の採用は各大学と教員に任されているが、教員免許取得がカリキュラムの枠組みと各科目の授業内容、学習到達度の多くを実質的に規定しているといえるであろう。将来、教育実習を実施する基準に達していることを確認するための第三者機関による「共用試験」が実施されることになるかもしれない。しかし、潮木の提言に従って、「教育課程編成・実施の方針」が標準化され、標準カリキュラムの下で共通教科書を使って授業し、単位を全国共通の資格認定試験で認定する教育が行われるならば、教員免許の国家資格化に容易につながる事が予測される。それが教員養成の在り方として望ましいものであるか、慎重に検討されるべきであろう。

9.2 外部試験による成績評価と単位認定

外部試験が、各科目の学習到達度をすべて適切に評価できるわけではない。たとえば、これらの検定試験は長文のレポートや論文の読解および著作の能力を評価するものではないこと、ディスカッションやグループワークにおけるプレゼンテーションやコミュニケーションの能力、リー

ダーシップを評価するものでもないことに注意すべきである。これらは4年間の学士課程の様々な授業のなかで時間をかけて育成され評価される資質・能力である。

現在、単位認定や成績評価に用いられている外部試験には科目別に次のようなものがある。

● 外国語の検定試験

英語では、「実用英語技能検定」や TOEFL, TOEIC などの外部試験による成績評価・単位認定制度が多くで大学で採用されている。

● 経済学の検定試験

「経済学検定試験 (ERE)」は、主として経済学部および社会科学系学部の学生を対象に経済学の数理的・理論的な基礎知識の習得程度と実体経済での応用能力のレベルを判定する試験である。ERE の結果に対して単位認定を行う大学 (成蹊大学、東洋大学など) や、ERE の科目をカリキュラムに導入する大学 (香川大学など) がある。

● 統計学の検定試験

統計に関する知識や活用力を評価する日本統計学会認定の全国統一試験に「統計検定」がある。この「統計検定」の成績を授業の成績評価の一部に利用している大学がある (龍谷大学、早稲田大学など)。

10. おわりに

日本の GPA 評価法は、当初は伝統的な4段階評価法 (表1) を敷衍する形で、アメリカの評価法 (基本形) に倣う5段階4点尺度法 (表5, 表6GP-1) が主に導入された。しかし、評価法の標準的な在り方に対する共通認識が不十分なまま、近年は評価の精度を高め、より公正な評価とする必要性、および海外、特にアメリカの評価法の実態に合わせて互換性を確保する重要性を考慮して、LG では6段階以上の、gp では最大値4.3点以上の評価法が少なからず導入されている。これが現在の日本の大学で様々な形式の GPA 評価法が乱立する状態となっている理由である。

本研究では資料収集の時間と経費を節約するために、調査は Web 検索を活用して行った。この調査で判明したことは、次の点である。

- ・成績評価法や GPA 評価法を説明する資料を検索しても不明な大学がかなりある。

- ・ 検索はヒットするが、必要な情報にアクセスするのに手間がかかる大学が少なくない。
- ・ 学生および授業の成績評価結果のデータを公開している大学があまりに少ない。
- ・ 成績証明書の記載事項を説明している大学も少ない。
- ・ GPA 評価法が学部により異なる大学がある (長崎大学など)。

国立大学全82校 (大学院, 大学院大学を除く) の2016, 2017年度について, GPA 評価法を調べた結果は, LG の段階数では5段階が62.2%, 6段階以上が12.2%, 不明と未導入が24.4% であり, gp の最大値は4.0が56.1%, 4.3以上が19.5%, 不明と未導入が23.2% である。ここで不明には, 導入あるいは未導入が不明, 導入しているが詳細不明の両者を含む数値である。未導入は東京大学など数少ない。

本稿では, 外国の大学における GPA 評価法や GPA の国際的互換性, 成績インフレーションの問題については詳しく考察することができなかった。これらについては, 別の機会に報告したい。

謝辞

渡部信一教授 (東北大学大学院教育情報学研究部) には, 論文の投稿まで長い間お待たせしたにもかかわらず, 『教育情報学研究』誌への掲載の手続きを快く引き受けてくださいました。このご温情のおかげをもちまして, 本論文を仕上げることができました。ここに厚く感謝の意を表します。

注

1. GPA 評価法の調査は各大学の Web ページを参照することで行ったが, すべての大学の Web サイトを参考文献として引用することは煩雑になるので避けた。GPA 評価法の導入年度が分かる大学については西暦で入れた。

参考文献

- (1) 大学審議会 (1998): “21世紀の大学像と今後の改革方策について (答申)”,
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_daigaku_index/toushin/1315932.htm
- (2) 中央教育審議会 (2008): “学士課程教育の構築に向けて (答申)”,
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm
- (3) 文部科学省 (2015): “平成25年度の大学における教育内容等の改革状況について”,
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1361916.htm
- (4) 半田智久 (2012): “GPA 制度の研究—functional GPA に向けて—”, 大学教育出版
- (5) 英 崇夫 (2003): “[徳島大学] 工学部におけるアウトカムズ評価”, 高等教育情報センター編『成績評価の厳格化と学習支援システム』, pp.107-117, 地域科学研究会
- (6) 圓月勝博 (2004): “GPA 制度と厳格な成績評価”, 大学時報, 第298号, pp.34-39
- (7) 東京大学 (2014): “新成績評価基準の導入について”,
<http://www.c.u-tokyo.ac.jp/fas/7-shinseiseikiyouka.pdf>
- (8) 日米教育委員会 (2015): “アメリカ留学公式ガイドブック”, p.125, アルク
http://www.fulbright.jp/study/schedule/step4_01.html
- (9) 綾 皓二郎 (2017): “日本の大学における GPA 制度の導入と運用に見出される特徴と問題点 - Web 検索による研究調査 -”,
2017 PC Conference 論文集, pp.259-262
- (10) 日本学生支援機構 (2016): “平成28年度海外留学支援制度 (協定派遣) 募集要項”,
http://www.jasso.go.jp/ryugaku/tantoshu/study_a/short_term_h/2017.html#02
- (11) 旭川医科大学 (2004): “旭川医科大学医学部医学科の授業科目の履修方法, 試験, 進級等取扱規程”,
http://www.asahikawa-med.ac.jp/bureau/kitei/reiki_honbun/w239RG00000218.html
“旭川医科大学学生表彰実施細則”, http://www.asahikawa-med.ac.jp/bureau/kitei/reiki_honbun/w239RG00000255.html

- (12) 国際基督教大学 (2011): “学生ハンドブック”, 半田智久『成績評価の厳正化と GPA 活用の深化』, pp.191-195, 地域科学研究会,
- (13) 玉川大学 (2015): “学生要覧 Web サイト2015—履修ガイド GPA 制度”, http://www.tamagawa.ac.jp/student_guidebook/2015/courses.html
- (14) 北海道大学 (2006): “「秀」評価, GPA 制度及び履修登録単位数の上限設定の実施について”, <http://educate.academic.hokudai.ac.jp/GPA/gpa-q&a18.03.09.pdf>
- (15) 一橋大学 (2010): “教員用授業用ハンドブック2010年度版”, <http://www.rdche.hit-u.ac.jp/wp-content/themes/daigaku-kyoiku/download/lecture/10handbook.pdf>
- (16) 一橋大学 (2017): “教員用授業用ハンドブック2017年度版”, <http://www.rdche.hit-u.ac.jp/wp-content/themes/daigaku-kyoiku/download/lecture/handbook2017.pdf>
- (17) お茶の水女子大学 (2011): “国立大学法人お茶の水女子大学 GPA 制度に関する要項”, http://www.ocha.ac.jp/reiki/reiki_honbun/x243RG00000279.html
- (18) 青森公立大学 (2009): “青森公立大学経営経済学部履修規程”, https://www.nebuta.ac.jp/corporation/pdf/05_05_01.pdf
- (19) 北海道大学 (2014): “新 GPA 制度及び厳格な卒業認定基準の導入について (通知)”, http://educate.academic.hokudai.ac.jp/syllabus/2014_newgpa.pdf
- (20) 北海道大学: “北海道大学 成績分布 WEB 公開システム—成績評価分布状況表—”, <http://educate.academic.hokudai.ac.jp/seiseki/GradeDistSerch.aspx>
- (21) Rojstaczer, S. and Healy, C. (2010): “Grading in American Colleges and Universities”, <http://www.gradeinflation.com/tcr2010grading.pdf>
- (22) GradeInflation.com(2016): “National Trends in Grade Inflation, American Colleges and Universities”, <http://www.gradeinflation.com/>
- (23) 徳島大学教養教育院 (2016): “2016年度教養教育履修の手引き”, <http://www.g-edu.tokushima-u.ac.jp/ceducom/2016tebiki.pdf>
- (24) 後藤和雄 (2006): “GPA 定義の問題点とその一般化”, 鳥取大学教育総合センター紀要, 第3号, pp.11-27
- (25) 関西国際大学: “学修成果に関わる評価”, http://www.kuins.ac.jp/kuinsHP/about/kuis_information/grade_point.pdf
- (26) 弘前大学 (2014): “21世紀教育科目の『成績評価の方法と基準』”, <http://culture.cc.hirosaki-u.ac.jp/21seiki/Siryou/seisekihyouka2014.pdf>
- (27) 筑波大学 (2013): “成績評価分布の目標について《学士課程》”, http://www.tsukuba.ac.jp/education/pdf/gpa_mokuhyo.pdf
- (28) 田中正弘 (2012): “信頼できる成績評価のために”, http://culture.cc.hirosaki-u.ac.jp/21seiki/Tanaka/Masahiro_Tanaka_2012_02_23.pdf
- (29) 矢部正之 (2008): “成績評価分布を用いた Community-based FD の概要 (報告)”, http://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/general/news/uploaddocs/bunpu_2008zen.pdf
- (30) 同志社大学: “DUET 成績評価の得点分布の公表”, <https://duet.doshisha.ac.jp/kokai/html/fi/fi020/FI02001G.html>
- (31) 絹川正吉 (2006): “大学教育の思想—学士課程教育のデザイン—”, p.191, 東信堂,
- (32) 西垣 順子 (2007): “成績評価の何をどのようにに検討するべきなのか?”, 大阪市立大学『大学教育』, 第4巻, 第1号, pp.1-11
- (33) 梶田 毅一 (2000): “新しい大学教育を創る”, p.91, 有斐閣
- (34) 立松 潔 (2008): “教養教育科目の GPA 分析—適正な成績評価に向けて—”, 山形大学高等教育研究年報, 第2号, pp.51-55
- (35) 功刀 滋 (2012): “学生の学習成果・達成度の評価を巡る問題点—専門教育を中心に—”,

- http://www.niad.ac.jp/n_kenkyukai/no13_2012forum_Kunugi_presentation_j.pdf
- (36) 北海道大学 (2013): “『自由設計科目制度』ガイドブック (平成25年度入学用)”, <http://educate.academic.hokudai.ac.jp/center/free25.pdf>
- (37) 吉原正彦 (2003): “[青森公立大学] 建学理念としての GPA 制度—開学10年の実績”, 高等教育情報センター編『成績評価の厳格化と学習支援システム』, pp.67-82, 地域科学研究会,
- (38) 青森公立大学 (2016): “青森公立大学経営経済学部 退学者及び再入学者の状況”, <https://www.nebuta.ac.jp/information/04-08.pdf>
- (39) 読売新聞教育ネットワーク事務局 (2016): “大学の实力2016”, 中央公論新社
- (40) 浜田知久馬 (2014): “GPA による成績評価に影響を及ぼす要因について解析”, 平成26年度 東京理科大学総合教育機構教育開発センター 活動報告書, pp.58-66
- (41) 一橋新聞 WEB (2016): “【速報】GPA 卒業要件, 撤廃へ”, <http://hit-press.org/news/467>
- (42) 加藤 鉦三, 奉 鉦京 (2011): “信州大学が目指すべき GPA の形について”, 信州大学人文社会科学研究所, 第5号, pp.128-141
- (43) 館 昭 (1999): “日本の大学における成績評価改革とアメリカの GPA 制度”, 大学時報, 第269号, pp.40-43
- (44) 潮木守一 (2013): “大学再生への具体像 第2版—大学とは何か”, pp.269-300, 東信堂
- (45) Levine, A. and Cureton, J. S. 丹治 めぐみ 訳 (2000): “現代アメリカ大学生群像”, p.171, 玉川大学出版部
- (46) Franke, R. et al. (2010): “Findings from the 2009 Administration of the College Senior Survey (CSS)”, p.81, Higher Education Research Institute at UCLA
- (47) Cornell University (2015): “2015 Cornell PULSE Survey”, p.106, <http://irp.dpb.cornell.edu/wp-content/uploads/2012/03/2015-PULSE-tables-w-cover-page.pdf>
- (48) 佐々木紀彦 (2011): “米国製のエリートは本当にすごいのか?”, p.17, 東洋経済新報社
- (49) Weinberg College of Arts & Sciences: “C- AND D Grades”, <http://www.weinberg.northwestern.edu/undergraduate/courses-registration-grades/c--and-d-grades.html>
- (50) Pennsylvania State University: “Courses Requiring at Least “C” Grades”, <https://handbook.psu.edu/content/c-grade-courses>
- (51) 林直嗣 (2010): “大学教育のガバナンスと成績評価基準 (下)”, 経営志林, 第47巻, 第3号, pp.57-72
- (52) 稲垣麻央, 能上慎也 (2013): “科目難易度を考慮した GPA について”, 電子情報通信学会総合大会情報・システム講演論文集1, D-17-1, p.193
- (53) 同志社大学 (2006): “情報環境の整備と成績評価の厳格化—学修支援システム DUET と GPA 得点分布公表—”, http://www.doshisha.ac.jp/support_program/feature/feature.html
- (54) 西垣 順子 (2003): “信州大学における GPA 制度の導入に関する研究報告”, 教育システム研究開発センター紀要, 第9号, pp.141-150
- (55) 潮木守一 (2006): “大学再生への具体像 第1版—大学とは何か”, pp.236-240, 東信堂
- (56) 情報処理学会 (2010): “情報専門学科におけるカリキュラム標準 J07”, <https://www.ipsj.or.jp/12kyoiku/J07/J0720090407.html>
- (57) モデル・コア・カリキュラム改訂に関する専門研究委員会 (2016): “医学教育モデル・コア・カリキュラム平成28年度改訂版”http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/06/28/1383961_01.pdf
- (58) 日本学術会議大学教育の分野別質保証の在り方検討委員会 (2009): “分野別の教育課程編成上の参照基準について”, <http://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/daigaku/pdf/d-8-1.pdf>
- (59) JABEE (日本技術者教育認定機構): “JABEE と 認 定 制 度”, http://www.jabee.org/about_jabee/

Grade Point Average (GPA) Policy and Practice: GPA Systems in Japanese Universities

AYA Kohjiro

Professor Emeritus at Ishinomaki Senshu University

ABSTRACT

The purpose of this study is to examine the introduction and operation of various types of grade point average (GPA) evaluation methods for undergraduate education at Japanese universities, and to clarify different characteristics of Japanese GPA systems and problems to be solved of them. In addition, this paper reviews a proposal for standard curricula and textbooks, external qualifying examinations by third party institutions, and points out what is missing from the proposal.

The following findings emerge from this study: (1) There is no standard GPA evaluation method in Japanese universities, although Japanese GPA systems are introduced following the American GPA system. Japanese GPA systems vary significantly from one university to another. (2) A GPA system in Japan may be used within one university, but it is difficult to be commonly employed in other universities as an indicator of academic performance of students, and of quality of undergraduate education. (3) There are diverse levels of "strictness" of grading evaluation by Japanese GPA systems. (4) Some of the GPA evaluation methods in Japanese universities are not suitable to be adopted as the recommendation criteria of college retention or withdrawal in an American view of education. (5) It is required to build transparent, fair and accountable GPA systems, to share evaluation information about students' academic achievements among faculty members, to make the credit system substantial, and to fully utilize the GPA systems as a means of quality assurance of higher education in Japan. (6) It is desirable for all the Japanese universities to disclose information about GPA policy and GPA data in their academic reports or on their websites. These findings strongly suggest that we need to make up a standard form of the Japanese GPA system for the best interest of students.

Key words: grade point, GPA, strict grading evaluation, quality assurance, graduation requirements